

現代俳句散歩（二）（四月・五月）

（現代俳句カレンダー2025より）

佐怒賀正美

白孔雀放し飼ひなる日永かな

黒岩徳将

昨秋逝去された室生氏の句は、やさしい表現の中に、恩師の生きてきた時代背景が不意に見えた驚きを詠んで印象深い。二句目、「桃花水」とは「桃の花の咲く三月ごろ、雪・氷が解けてあふれるばかりに流れる川の水」（『日本国語大辞典 第二版』）。雪解水のほどりに春を迎えて安らいだ馬の表情が見える。三句目は、春うららの日差しの中に白い孔雀を描いた佳品。神聖さを感じさせるような白さは心を癒してくれそうだ。孔雀の自由な在り方が作者にも尊い。

蝶よ川の向こうの蝶は邪魔ですか 池田澄子

この句は、川岸に立つて春の蝶を眺めているのである。大河ではなく川向こうの蝶が見える小川や堀川くらいの規模のものかもしれない。作者が眺めていた此岸の蝶たちは、なぜか川を渡つていこうとしない。自分たちの仲間だけで楽しんではいるように目に映る。その時、ひょっとしたら、対岸の蝶たちはこちら側の蝶たちにとつて「邪魔」なのかもしれないふと感じた。唐突でけつこう強引ながら、蝶の世界の中に人間世界の差別や敵対意識を二重写しに感じ取ってしまったのだつた。川というのは重要な水運の役割を果たすと同時に、二つの向き合う土地を分けて、彼此に異なる文化を育んだけりもある。時には、彼此の住民感情がぶつかり合つたり、敵対することもある。現代では、国内のヘイトスピーチに始まり、ウクライナへのロシアの侵入、欧州に見る右傾化など、「邪魔」という語が時代を支配しかねない情勢にある。蝶に代表される春うららな陽ざしの中で、時代の本質的な危機感をさらりと蝶（＝読者）に問い合わせた軽妙な句。語りかけのような口語のリズムも生かされている。

霓といふ兜太が贈りくるゝもの 宮坂 静生
カレンダーの五月より。『字通』には、「虹に雌雄の別があり、色の鮮やかなものは雄、色の暗いものは雌霓（しげい）。虹の首尾に竜形の頭があり、兒はその象形」とあるが、もちろん「虹」の語義もある。兜太の秩父から届いてくるような殊に美しい虹であったのだろう。天上に去つた兜太は、地上の俳人たちに分け隔てなく「虹」を贈つてくださった。兜太への思いが瑞々しいかたちで表れた句だと思う。

言葉になる前の手のひら青嵐

宮坂 静生

中内 亮玄

櫻子の木を素足で登る児の速さ

霧野萬地郎

穂高岳三里晴なる袋掛け

和田 照海

一句目は、やや抽象的ながら、ジエスチャーなど言葉を発する直前の手の仕草を思い浮かべた。あるいはまだ言葉をしゃべれない赤子の手のひらの表情か。青嵐の光が明るい。二句目、南国などの風景か。木登りの児の元気よさが心地よい。「素足」にこそ木肌がない。穂高岳の句も、広く晴れ渡つて、袋掛けの作業もすがすがしい。

さくら見る先生ふいに拳手の札
桃花水仮顔なる牧の馬

室生幸太郎
窪田 英治

現代俳句散歩（二）（二月・三月）

（）現代俳句カレンダー 2025より

佐怒賀正美

山笑ふ奥嶺は笑ひこらへをり

本郷秀子

山村正義

地球の余命を「薄氷」（しかも鼓膜）から感じた詩感覚のよさ。

野鳩を見遣りながら「あの鳩寒そうだね」と樹と話している作者。三句目、こんな父子関係、いまも捨てたものじゃない。息の白い通い合いがうれしい。奥嶺が笑うのはこれから。いや、すでに笑いをこらえている、というユーモア。何気ない楽しさの句が並んだ。

三月の短冊には、「蛇穴を出でてゴドーに懐きけり 佐怒賀正美」も載せていただいているが、同じ月で惹かれたのは次の句。

さんしゆゆのあかり しょんぼりさんおいで 恩田侑布子

昭和ノスタイル的な童謡ふうの仕立てながら、「しょんぼりさんおいで」は現代の氣弱な子などにも通うやさしい呼びかけ。山茱萸の花は黄金色ながら、偉ぶらず、細かな光を投げかける。ささめくような笑いで子を誘い待っているようだ。

鉄橋の鉄うすみどり春の川

田中亜美

手鏡をちよつと借りたり卒業式

岡田由季

後ろから鈴の音を足す遍路道

秋岡宣子

海底の闇をすくつてめばるの目

及川真梨子

小林姓の人には申し訳ないが、この「小林」は笑いと共にすつきりと収まっている。坪内穂典さんの「たんぽぽのぽぽ」みたいなユニークで気さくな滑稽の句。二番煎じが効かない独自の発想だ。

薄氷の鼓膜地球にも余命

瀬戸優理子

しんがりの野鳩寒かる樹と話す

山崎政江

田中作の、硬軟取り合わせた、パステルカラーのような春の景。高校生ぐらいだろうか。手鏡の借用から刻まれる卒業式の日の、一瞬の自画像。鈴の音と共に後ろから遍路に加わり同じ景を進む心の温かさ。まんまるのメバルの目は、海底の闇を掬った黒さであつた。いずれも具体的な一点から景が広がる。

現代俳句散步（一月）

（現代俳句カレンダー2025より）

佐怒賀正美

多様な海の記憶を地酒歓談しながら三箇日はどんどんと過ぎてゆく。深い記憶が豊かに繙かれるのだ。

うさぎめく君ら花びら餅日和 赤羽根めぐみ
現代俳句協会の今年のカレンダーの一月は、
土中こそ聲あふれおり福寿草 高野ムツオ
の色紙に始まり、二十三名の協会員の新年の句が並ぶ。その第一句が上掲の赤羽根さんの句である。ちなみに、高野氏の「福寿草」は正月用の鉢植えではなく、野生のものであろうが、土中のさまざまな生物の声が立ち昇つてくるようで、ゆたかな心持にさせられる。他にこんな句も。

たちまちに遠景となる元旦 鳴原さき子
木と紙の国と言はれて空つ風 鈴木 牛後
生國の海を語らい年酒酌む 村上 友美

文體的には、助詞や切れ字を用いず、名詞のみの構成だが、ひらがなを巧みに交えながら視覚的にも簡潔でやさしい印象を生んでい。一つ間違うと威圧的にも働く「君ら」も、ここでは幼子に向いた語りかけのようで、親しく楽しい光をくぐり抜けている。世界中、こんな明るい一年にしたいものだ。

たしかに我々は、期待と共に元旦を待ちわびるが、当日が過ぎるとあつという間にどんどん離れて行ってしまう。「遠景」とは、時間的意識を空間的イメージに変える作者の魔法だ。また、二句目は一冬を厳しく吹きつける空つ風に対して、家屋の方は堅固な石でも煉瓦でも鉄でもなく、「木と紙」であると、やや誇張氣味に日本の精神的風土にも踏み込んだようなあしらいになつてている。三句目、年酒を交しているのは旧知の友同士か。いつの間に話題はそれぞれの生國の「海」のことには及ぶ。広やかな豊穣の海、荒れ狂つた海、